

# 1 2 【国際教養学部】 小論文問題

2025(令和7)年度

## 【注意事項】

1. この問題冊子は「小論文」である。
2. 試験時間は60分である。
3. 試験開始の合図まで、この問題冊子を開いてはいけない。ただし、表紙はあらかじめよく読んでおくこと。
4. 試験開始後すぐに、以下の5および6に記載されていることを確認すること。
5. この問題冊子の印刷は1ページから4ページまでである。
6. 解答用紙は問題冊子中央に1枚はさみこんである。
7. 問題冊子に落丁、乱丁、印刷不鮮明な箇所等があった場合および解答用紙がない場合は、手をあげて監督者に申し出ること。
8. 試験開始後、解答用紙の所定の欄に、受験番号と氏名を記入すること。  
(受験番号は2箇所、氏名は1箇所)
9. 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。解答用紙の裏面に記入してはいけない。
10. 問題番号に対応した解答欄に解答していない場合は、採点されない場合もあるので注意すること。
11. 解答する字数に指定がある場合は、句読点も1字として数えること。英数字を記入する場合は、1字分のマス目に2文字まで記入してよい。
12. 問題冊子の中の白紙部分は下書き等に使用してよい。
13. 解答用紙を切り離したり、持ち帰ってはいけない。
14. 試験終了時刻まで退室を認めない。試験中の気分不快やトイレ等、やむを得ない場合には、手をあげて監督者を呼び、指示に従うこと。
15. 試験終了後は問題冊子を持ち帰ること。

〔問題〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この本では、伝統に根ざした判断力や、政治に参加する市民としての能力や、専門化した知のあいだをつなぐ思考といった形で、さまざまな「教養」の望ましいありようを、とりあげてきた。しかし、そうした「教養」が、「教養」の足りない者に対してみずからを誇り、さらには自分の「教養」を見せつけることで、彼らを自分の後に従って精進するよう導き、支配しようとする態度に行き着かないかどうか。「教養」を、何らかの知識を、まったくの無から十分な量にむけて蓄積してゆく、量の拡大の過程と見なしているかぎり、競争と支配の思考へと誘う罫は、どこかで存続しつづける。そして、「教養」の増進に努める者たちの精神をむしばんでゆくことにもなるだろう。

かつて、大正期の和辻哲郎・阿部次郎や、1930年代の河合栄治郎・三木清といった人々は、「教養」を積んでいけば人格も向上し、みずからの物欲や支配欲を上手に手なずけることができると説いた。その確信は、大正時代から戦後に至るまで、しだいに先細りになりながらも、読書する若者たちによっても共有されていた。

だが、1970年代以降、大学への進学率が上がり、ことさらに「教養」のある存在として、大学生である自分を、大衆から区別することが不要で不可能になってくると、「教養」のかけ声は、もはや説得力を失ってしまった。むしろ、「教養」をふりかざす者については、「教養」なき者に対する蔑視が、敏感にかぎとられ、敬遠されるようになる。

「教養」を積みばいったいどうなるというのか。もちろん、「教養」を積んでゆく過程それ自体が目的だと答える手もあるだろう。だが、間に合わせの<sup>こたえ</sup>答すらまっとうに語らず、答えることを放棄したまま、「教養」の必要を説く大人や先輩が、どうもうさん臭い。大学生の「教養」ばなれには、そうした要因もあったのではないか。

しかし、その現状にため息をつきながら<sup>(A)</sup>、もはや「教養」など不要のだと放り出すわけにはいかない。人間が身につける知が、読み書き・計算をざっと身につけただけで、あとはマニュアル化された実用知識か、あるいは高度に専門化した学問だけになってしまえば、どうなるか。学問でもジャーナリズムでも、専門の境界をこえるような、豊かで斬新な発想は、まず生まれなくなる。さらに、異なる価値観や世界観を抱いた人間どうしの対話が、日常生活の次元でも、ずっと困難になってゆくだろう。人と人とが生き生きとした交流を保ち、社会を円滑に動かしてゆくためには、この本で色々とりあげてきたような「教養」が、やはり必要なのである。

何らかの「教養」を追求しながら、しかも競争と支配の思考へと陥ってしまうのを避けるには、どうすればいいのか。政治社会学者の栗原彬が、ジョージ・オーウェルのエッセイ「絞首刑」(1931年)を引きながら、語っているところが興味ぶかい。これは、オーウェルが28歳の年に雑誌に寄稿した作品であり、その前に、ビルマに渡ってインド帝国警察に警官として勤めていたときの経験をもとにしている。

ある朝、雨期で湿った空気のなか、オーウェルは刑務所の庭で、一人のインド人の男が絞首刑にかけられるのに立ちあつた。男は手錠をはめられ、両側から衛兵に腕をとられながら、絞首台にむ

かって歩いてゆく。だが、水たまりに近づくと、男はふと歩みをそらし、それを避けた。これを見た瞬間、オーウェルの心に小さな衝撃が走る。

奇妙なことだが、私はその時まで、ひとりの健康で正気な人間を殺してしまうことが何を意味するか、何も分かっていなかった。死刑囚が水たまりを避けて脇によけるのを見た時、私はその盛りの時に命を縮めることの秘密、その言い表せない誤りを知った。この男は死んでいない、われわれが生きているとちょうど同じに、彼も生きている。彼の身体のあらゆる器官が働いている——腸は消化を続けている、皮膚は代謝を続け、つめは伸び、組織は作られている——すべてはいつもと変わらず働いていたが、それは全くむだなことだった。彼のつめは、絞首台に立った時にも伸び続けるだろう。そして命にあと十分の一秒でおさらばという、宙を落ちている時にも。彼の目は黄色い砂利や灰色の壁を見る。脳はまだ記憶し、予知し、判断する——水たまりのことまで判断する。彼とわれわれは、共に歩き、同じ世界を見、聞き、感じ、分かる人間の一族なのだ。そして二分後、突然とぎれて、われわれのひとりはいってしまう——ひとつの心が失われ、ひとつの世界が失われる。(塩沢由典訳)

栗原は、水たまりを避けたインド人死刑囚のしぐさと、それを受けとめるオーウェルの態度の双方<sup>(B)</sup>に、大きな「教養」を見る。それはもちろん、何らかの「情報の蓄積」ではありえない。

死刑囚の側は、すぐに命を絶たれることがわかっているのに、足が汚れるのを無意識にさげ、みずからの「生への愛おしみ」を最後まで保ちつづけた。それを見たオーウェルの側も、自己と他者、植民地支配者と現地住民との間にある壁をのりこえ、目の前にいる死刑囚が自分と同じ人間であることを、感覚のすべてをもって了解し、「帝国主義の悪を一挙に知ってしまう」。このように、「限界状況で、教養は、生の証しとか、人間の尊厳としか言いようのないものとして、そっと現れる」。そうふまえたあとで、「私は教養ということばで、身体が他の身体と交通しながら、自分と世界とを知り、またそれを変えていく生の軌跡を思い描く」と栗原は語っている。

単なる知識や情報の集積と、「教養」とを区別するものは何か。それがかつての「教養主義」のように、高貴な道徳性と規定してすませる道をとらないならば、何が考えられるのか。このことをめぐって、本書ではさまざまな角度から検討してみたが、その窮極の一点とも言うべきものを、オーウェルと栗原は示している。

人が、世界をとらえ、しかもその世界が独自の原則にのっとって動いていることを、深く認めながら、それを理解し、世界とのおりあいをつけてゆくこと。他者が、自分とはまったく異なる志向をもった人間であることを了解しながら、ともに関係を保持し、新たに作りあげてゆくこと。そうした一連の営みを通じて、自分自身が変わってゆくこと。知識や情報としての「教養」をこえた、<sup>(C)</sup>「教養」の極限と言うべき、こうした心の習慣が、「教養」の営みの基盤になる。

こうした、通常の意味での「教養」を超え、それを支えるものとしての「教養」の重要性は、情報の

媒体に、インターネットとコンピューターが占める部分が大きくなっても、変わることはない。西垣通は、情報学の見地から、生物が世界とかかわり、それを意味あるものとして認知するための、膨大な「生命情報」が、もっとも広い意味での情報であると論じている。複雑でつねに動いている周囲の環境に対して、その時その場の自分の関心に基づき、意味のある世界を構成してゆく意識のはたらき。もっとも単純な例を挙げれば、この認知の過程で用いられる、たとえば、敵、異性、食物といった「パターン」が、情報の原型なのである。


「情報化社会」や「情報技術」などと言われる場合、「情報」としてたいい想定されているのは、これに対して、一つの意味内容に固定され、それが決して変わることのない「機械情報」である。それは、つねに変化し続ける「生命情報」の集まりの一部として、その流れを助けるものにすぎない。インターネットが伝える情報も、結局はこの「機械情報」にとどまり、人間にとってもっとも重要なものが、「生命情報」の総体だという条件に変わりはない。こうした「生命情報」の網の目を、一人一人が、自分の周囲に築きあげ、またそれを変えてゆけること。それが、「教養」の基盤をなす「教養」の、内実である。

同じ生物と言っても、もちろん人間の場合には、生きてゆくうえで直面する環境の複雑さの度合いが、格段に高まる。自然環境のような物の世界との交渉にとどまらず、つねに何らかの形で、ほかの人間とかかわりをもたなくてはいけない。そうした他者の意図は、自分にとってはまったく未知の領域にある。したがって、その複雑さに耐えながらコミュニケーションをとることで、社会関係を維持し、更新していかなくてはならない。

安富<sup>あゆむ</sup>歩は、クロード・レヴィ＝ストロースが『野生の思考』(1962年)で説いた概念を用いて、そのための思考方法を「ブリコラージュ」(器用仕事)と呼んでいる。一方が他方に対して働きかける、一方向の操作のはたらきではなく、それぞれにもちあわせている有限な情報を、おたがいにくみあわせ、構成しなおすことで、現状に対応する手だてをみだす。そうした、他者との水平の関係のなかでこそ、「教養」の基盤は培われるのである。これは、相手とおたがいに知恵を出しあい、たがいの言葉に驚きながら、それぞれに自分を変えてゆく過程であり、先に見たような、競争と支配の関係と、まったくの対極にある。

この、「教養」の基盤は、とにかく本をたくさん読めば身につくとか、とくに家庭や学校で教わればすむというものではない。それは、おそらくろくな教育を受けていない、オーウェルの描く死刑囚の例が示すとおりである。日常生活の全般において、さまざまな事物や他者とかかわるなかで、みずからの心と身体に、じっくりとしみつかせてゆくものだろう。その過程は生涯のあいだ続き、終わることがない。

(出典 荻部直, 『移りゆく「教養」』, NTT出版, 2007年。なお、出題の都合上、原文を一部改変した部分がある。)

- 
- (1) 下線部 (A) において、著者のいう「現状」とはどのような状況か。150 字以内で説明しなさい。
- (2) 下線部 (B) において、著者が、栗原の解説に依拠して、オーウェルの態度が示していると考ええる「教養」とは何か。150 字以内で説明しなさい。
- (3) 下線部 (C) に関連して、情報化社会における「教養」を著者はどのように捉えているかを簡潔にまとめた上で、今日において著者のいう「教養」はどのような役割を果たすべきか、あなたの考えを 400 字以内で理由を示して論じなさい。なお、現在では問題文の出典が出版された当時 (2007 年) より SNS, AI, ロボット, ビッグデータ活用など技術の発展が一層進み、他者や社会との関係がより複雑化したことを踏まえること。